

紹介

●續法制史の研究 文學博士 三浦 周行著

「法制史の研究」が出て、以來其の出版の一日も遅からん事を希うた本書は、六年後の今日殆んど前者と同一の外貌を以て世に現はれた。菊版千五百三十頁に餘る大著は未だ之を精讀するの暇なきを遺憾とするが、茲に極めて大觀を紹介すれば、第一編を總論として法制史概論及び法制史講義を收め、以下第二編より第四編に至る間は古代、中世、近世の問題によりて時代的に配列し、第五編を雜纂として自治制度の發達以下四篇を收められて居る。前後二十九編は正編の選に漏れたもの及び其後の成稿に係るもので、中には既に専門雜誌等に於て發表されたものもあるけれども、「武家制度の發達」「公家制度の發達」「貞永式目」「守護と大名」等多くは筐底に秘められたものであつた。就中、中世に收められたる「武家制度の發達」は三百頁に垂んとする長大編であり「貞永式目」

は百五十頁に及んゝするものである。其外古代篇中の「公家制度の發達」「信仰と法律」中世篇中の「鎌倉時代の土地制度」「鎌倉時代の家族制度」「守護と大名」「樵談治要と文明一統記」「武田家の法律」「甲州法度」近世篇中の「江戸幕府の朝廷に對する法制」「江戸時代に於ける賭博犯の種類」の如き何人も看過する事の出来ない名編である。著者も序文に於て説かれた如く、法制史の研究は極めて難事であつて、世の所謂法制史家は法制其物の研究に没頭するの餘り、法制も亦是一般世相の反映に過ぎざる事を閑却するものゝ多い時に當つて、著者が法制の背景たる時代文化の推移を洞察して以て「法制」の因由を究明し、社會事象との交渉を検討されて居るのは、何と言つても他人の追隨を許さぬ點であらう。本書は將來永く正編と共に法制史の寶庫として法制史家は勿論、經濟史家、社會學者、歴史家等の爲めに利用され、其研究に絶大の援助を與るであらうと信ずる。又卷末の索引三十頁は頗る重寶であつて一種の辭書の如く役立つ事であらう。(菊版一五六三頁、岩波書店發行、價九、五〇)

●南蠻廣記

文學博士 新村 出著

南蠻記以後に成れる外來文物に關する論考及び異國趣味に因める述作を主として南蠻記所收の若干篇を併せ收め類に従ひて編次したものが本書である。第一「西教篇」は西教の弘布と禁制に關するもの九篇を集め、第二「典籍篇」は典籍印刷及び翻譯に關するもの十五種を配し、繪畫其他染織物に關するもの九篇を纏めて第三の「藝術篇」を編んで居る。誰もが言ふ如く著者は好き文獻學者の持ち得る特質を一身に具備して居られる。過去の世界への憧憬、言語典籍に關する比類少き博識、飽くなき詮索癖、好奇心、繊細にして鋭敏なる感受性、氣品高き表現法等を具現して以て海の彼方に夢魂を漂はせ、邪宗の門・蘭學の庭に出入し、更紗模様を熱愛して十幾年かに物せられたものである。何れの一編を探り讀むも限りなき興味を抱かさねば已まないものである。殊に西教篇中の「足利學校の盛時と西教宣傳」、典籍篇中の「活字印刷術の由來」、藝術篇中の「西洋畫傳來の由來」、「古銅版畫」

辻蘭室」の如き吾人は頗る興味を以て讀んだものである。（四六版五四五頁、岩波書店發行、價三、〇〇）

●續南蠻廣記

文學博士 新村 出著

前者の續編とも見るべくしてしかも著しく異れる内容を以て編綴せられた。即ち「洋學篇」には洋學の開始と興隆とに關するものとして「北島見信の『紅毛天地二圖贅說』」以下七篇、「海槎篇」は海上の往來と漂流に關するものとして「足利時代に於る日本と南國との關係」以下五篇、「鎖國篇」は鎖國の得失と異國趣味に關するもの五篇、南國への憧憬と海洋の情緒に關するもの十一篇は「情趣篇」に收められて居り、加ふるに各篇共に珍奇にして南蠻情緒の豊かなる圖版四五葉を挿み、讀者の目を慰めしめてある。殊にその卷首には圖版に就ての詳細な説明があつて、前後の各篇を通じて何れも高らかに唱誦したい様な、白珠のやうな奇麗暢悠な筆致で綴られてある。（四六版五一〇頁、岩波書店發行、價三、〇〇）

●人物論叢

文學博士 辻 善之助著

辻博士は本年春御母親の喜壽を慶せられ、その記念のために人物論に關する舊稿二七を選択して刊行せられたのが本書である。聖德太子、傳教大師、明慧上人、親鸞、日蓮の如き代表的な宗教關係者、花園天皇、平清盛、源賴朝、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、片桐且元、柳澤吉保、竹内式部の如き英主及び偉大なる政治家を中心にして其の時代を論究したものであつて、如此多數のしかも政教兩方面の劃期的な人物に關する所論であるから、人物論とは言へ、或る意味に於て人物中心の日本史とも言ひ得、政教交渉史とも見る事が出来る。殊に四十七葉の關係史料が挿入圖版として隨所に配置されてある事は讀者をして倦怠を感ずる事なく卷末まで讀了さすものである。こりわけてそれらの圖版が何れもあり世間に知られて居ない稀觀のものである事はさすがに博士の論著であるこ首肯さるゝであらう。(菊版三九六頁、雄山閣發行、價、四〇〇)(〔以上中村〕)

●近世農村問題史論

經濟學博士 本庄榮治郎著

著者が昨夏京都帝國大學にて講ぜられた稿本を出版されたものである。例によつて博引傍搜、江戸時代に於ける農村問題を論究して餘蘊がない、四六版三二九頁、校正甚だ行き届いて印刷も實に手に入つたものだ、農村問題の意義は近世農村問題の特質を始終にして、農業土地租稅制度、農民政策、農民の生活、人口の減退及勞力の欠乏、田地の兼併及荒廢、小作制度及び小作問題、救荒政策、農民暴動等を論じてある。近世の經濟史に於ける博士の造詣については世既に定評のある所、吾人亦これに啓發せらるゝ處が多いが、たゞ徳川時代に於ける農民への干涉が悉く階級的專制政治を維持せんが爲に、恰も人間を牛馬の様に取扱つてゐるこのみから出でゐる如く説いて居られるのは如何か。成程當時の農本主義は農業本位主義であり、貴農思想は貴穀思想であらうが、併しながら、一面治者階級としての武人は、民はかくあるべきものだを信ぜしために、かくの如きこまで教ふべきものだを考へてゐたのではあるまいか。即ち彼等の心の奥には民を治むることは民を教ふるこゝだこゝいふ考